

平成十一年一月十九日 最終講義

『観心本尊抄』の【本尊段】について

上 田 本 昌

皆様、ご苦勞様でございます。

最終講義も四人目ということで、殿をつとめさせていただくことになりました。最終講義の中の最終講義ということになるかと思えます。本日は「観心本尊抄」の【本尊段】の講義をさせていただくということで、法衣着用をさせていただきます。ご了承いただきたいと存じます。

お手元に資料がお配りしてございます。この「観心本尊抄」については、ご存じの方々ばかりだと思いますが、正確には「如来滅後五百歳始観心本尊抄」です。あまり長いので略して「観心本尊抄」。もっと略して、ただ「本尊抄」というふうにいわれているわけでありませぬ。

昔のことを言うと言われるかもしれませんが、この大学が祖山学院あるいは檀林などと言われておりました時代の話聞いてみますと、この「本尊抄」の講義を受けられるようになるのは、この大学で最高学年にならないと受講できないというふうに昔から言われて、我々の先輩はその様にしてきたようであります。私がこの学校へ初めて入りしたのは、「祖山中学」・「身延山専門学校」と言われている時代でありました。その旧制の専門学校でも、やはり、最高学年にならないと「本尊抄」が受講できないことになっていました。何故かと言うと、この「本尊抄」は皆様も

よくご存じの通り、お書きにされました日蓮聖人ご自身が「副状」の中で「この書は難多くして答え少なし。未聞ことなれば云々」と出てくるわけです。したがって、この「本尊抄」を読みこなすということは、よほどの素養がないと読みこなせないわけです。早い話が「本尊抄」の頁を開いてみますと最初にまず、「摩訶止観」が出てくるわけですね。したがって、天台学の素養がないと「本尊抄」は最初からわからないことになります。少なくとも天台の三大部について、何が書いてあるのかということがわかってないと、いきなり「本尊抄」へ入りましても冒頭からもうわからないことになり、そこから先、なかなか読んでもチンパンカンパンになってしまいます。その上に、ご承知の通り「本尊抄」という御書は全文が漢文体で書かれています。書き下しになっていません。したがって、漢文の読める人でないと解読できないことになるわけです。尚かつ、御真筆の「本尊抄」を拝見してみますと、漢文体の上に白文なんです。現在、御真筆は中山の法華経寺に保存されており、国宝に指定されております。原本を拝見してみますと送り仮名も返り点もついていない、まったくの白文です。したがって、昔の人は、「本尊抄」を学ぶということになりますと、なかなか読むだけでも精一杯で、どう読んでいいのかわからない所が多々出てくるわけです。そういうことで「昭和定本」は読みやすいように「返り点」や「送り仮名」がつけられてあります。ですから学生諸君の中には、御真筆もそうなっているだろうと思う人がいるかもしれません。けれども御真筆本は、返り点も送り仮名もついていない真更の白文で、漢字だけが並んでいるということになるわけでありまして、その為に実は後世になってから読み方が、学者によって多少違う点が出てくるわけです。早い話が、この「題号」につきましても「如来滅後五百歳始観心本尊抄」ですが、この題号の読み方さえも三通りも四通りもの読み方が分かれるわけでありまして。そうしますと、読み方が違えば意味が多少違ってくるわけでありまして。例えば「如来滅後心の本尊を観ずる御書」と言う

読み方と。「観心と本尊の御書」あるいは、「心を観じて本尊とする御書」とすると読み方がみな違ってくるわけです。そうすると微妙に意味合いも違ってくるわけです。今一例を申し上げましたが、題号だけさえも三通りも四通りもの読み方がある、そのつど、学者の間で異説が出てくるわけでありませう。先程、町田先生が見方によっていろいろ違うというお話をされましたけれども、読み方によっても、また違ってしまうわけです。

そういうことですので、この「本尊抄」というのは、大変「難多くして答え少なし」御執筆になられたご本人の日蓮聖人ご自身が、そうおっしゃっているのですから、これは、難解難入の御書であるということには間違いないと思います。尚かつ「副状」を読んでまいりますと、「設い他見に及ぶとも三人四人座を並べて読むことなかれ。」とあります。こうなってしまうと、大学の教室で三〇人・四〇人を相手に講義をするということは、以ての外であるということになってしまいます。そういうことから一対一で昔は師匠から弟子への講義が行われたのだと思いますが、現在の世の中で、そういうことを言っていたのでは大学の授業にならなくなってしまうわけでありませうから、三人四人座を列ねて読まなければならぬ。二〇人・三〇人座を列ねて読まなくてはならぬということにもなってくるのであります。本来の趣旨からいくと、そういう非常に取り扱い方の上からいっても難しい御書だということになるわけです。それだけに日蓮聖人が心を込めてお書きになられた御書だということになろうかと思うわけです。

今から七二七年程前、文永十年大歳癸酉、「卯月」というのは四月のこと、その二五日に「本尊抄」が出来上がっています。その翌日二六日に「副状」が出来上がりました、直接の相手は、富木常忍、大田・曾谷という方々が直接の対告衆であります、実は、そういう方々を通して門下に広く与えられた日蓮教学の根幹をなす御書だというふうにもなります。古来、「開本の両抄」といわれて、「開目抄」と「本尊抄」は御書の中でも特に重要な御書とされてい

るわけでありませう。そういう中で永年にわたって本尊抄の講義を続けてまいりました。大学では正式科目名称が、「祖書学」というのです。「祖書学」では何のことかわからないわけですが、この「本尊抄」のことであります。

お手元の資料をご覧くださいますとおわかりのとおりですが、これは「昭和定本」の七二二頁です。御書番号が一八番です。一一八番目にお書きになった御書ということになりますと思いますが、私が立正大学で初めて「観心本尊抄」の講義を聞いたのが、望月欲厚博士の「本尊抄」でありました。なんと、一学期間は題号釈で終わってしまったんです。これの分だと一年間で終わるのだろうかと心配になりました。延々と一学期間の授業は「如来滅後五百歲始観心本尊抄」というこれだけの題号で終わりました。一学期のテストが題号についてと、こういうわけです。題号を講義するだけで一学期かかったというくらいですから、本当は一年で「本尊抄」を全部講義するということは容易ではないわけですね。最近の中学や高等学校では英語は必須科目で、どうしても取らないと卒業できないわけです。ところが漢文はどつちでもよいということがあります。古典のところにはちよつと李白の漢詩が出てくる程度になってしまつた。したがつて、受講しなくてもいいというと言い過ぎかもしれません。ですから、漢文が読める人というのは大学に入つてきても、なかなか無いわけでありませう。それじゃ、その分英語が皆上達しているかということ、どうも、そのわりには「英語の方も苦手だ。漢文はなおさら苦手だ。」ということでは日本人はどうなつちやうのか心配です。ちよつと話が横道にそれましたがそんな感じがするわけで、漢文が現代人には漢字アレルギーとか言つて、見ただけでブツブツが出るなんてそういうくらいですから、まず、読み方の方の練習から入つていかななくてはならないということになります。そうすると、とても一年間で「観心本尊抄」を読みこなすということは非常に困難であります。そこで一気に大事なことだけを読んでいくような状況になつていくわけでありませうが、「本尊抄」の中で

特に大事なところというと、ご存じの通り資料の一行目の下の方にあります。「今本時ノ娑婆世界」というどなたでもよくご存じの一段で四十五字の法体段が出て参ります。この四十五字法体段は皆暗記で言えるようになっていてわけですけれども「今本時ノ娑婆世界ハ三災ヲ離レ四劫ヲ出タル常住ノ浄土ナリ。」今本時というのが喧しく言われまされども、釈尊によつて悟りが開きあらわされた本時という絶対の時間に開きあらわされた娑婆世界ということですから。その世界は根本の災いである三災四劫。すなわち火災・空災・水災、など。これには他の説、刀兵災・病疾災・飢餓災もあるようですが、そういうのも超克し、また四劫といわれる成劫・住劫・壞劫・空劫といった専門的に色々な語句が出てきますがそういうものを超克した永遠の浄土、それを「今本時」の「娑婆世界」というのであります。そして久遠実成の教主釈尊は、もはや過去においても入滅することなく、将来の世においても生まれ変わるようなことない。つまり常住不変である。生滅変化しないということです。「佛既ニ過去ニモ滅セズ未來ニモ生セズ。所化以テ同體ナリ。」とはこの教えを受ける者もその永遠の釈尊と団体になることができる。ということ。「此即己心ノ三千具足三種ノ世間也。」といっています。我々自身の心に三千の法界がそなえられているということであつて三種の世間とは、国土世間、衆生世間・五蘊世間という三世間を同時にそなえていることになるのであります。四十五字法体段は、詳しく説明するとそれだけで、また大変な時間がかかると思いますが、こういう大旨になっているのであります。

この四十五字法体段は、迹門十四品には未だこれを説いていないのだといわれています。法華經の内に於いても時機未熟の故であるとあります。この、ここが問題なんです。「此本門ノ肝心南無妙法蓮華經ノ五字ニ於テハ」と、ありますから、四十五字の法体段は、いわゆる我々末世の衆生が仏になる為の原理ということになります。原理という

言葉があまりよくないんですが、他に言葉がないのですから、その原理ともいうべき「事の一念三千」の法門を、これを「肝心の法門」という。そして、それが妙法蓮華經の五字であるということになるわけですから、四十五字の法体段は本門の肝心であり南無妙法蓮華經の五字そのものであるということになります。ところが「佛猶文殊藥王等ニモ付属シタマハズ。何ニ況ヤ其ノ已下ヲヤ」。文殊藥王というのは、迹化他方來の諸菩薩ということですから娑婆世界以外の國からおいでのなつたお客様の菩薩である。そういう方々に付属してない、「況ヤ其ノ已下ヲヤ。但地涌千界ヲ召シテ八品ヲ説テコレヲ付属シタマフ」。地涌千界につきましては、昨日、望月先生がお話下さつておられます。「地涌千界」つまり、上行・無辺行・淨行・安立行といった本化の四大菩薩が涌出品にはじめて登場してきます。この菩薩方を召し出して本門の八品、即ち涌出品第十五から十六・十七・十八・十九・二〇・二一・二二品囉累品までですね。これを本門八品といいます。この八品の間に地涌の菩薩にこれを付属せられた。特に神力品であります。事の一念三千、本門の肝心は地涌の菩薩方だけに付属せられたというのがこの説であります。

さて、そこで、その次が「本尊段」です。いよいよ「本尊段」に入るわけであります。本日の私のテーマは、この「本尊段」ということになるわけですが「八十九字本尊段」、昔からそのように言われております。その一番最初の「其本尊ノ爲體」とあります。この「其」という一字だけなのですが、実はこの「其」の一字に実は深い意味があると私は考えているわけであります。昔から、四十五字法体段が、「三種の世間也」でおわつて、そのあとで「その本尊のていたらく」から本尊段がはじまるわけです。つまり、法体段と本尊段が区切れて別々のものであると、うっかりすると考えがちなんです。四十五字法体段がここで終わったので、これからは、「本尊段」に入るのだ。ということ、そこで一端途切れるというように感じになるのですが、御遺文を忠実に読んで見ますと、「其本尊ノ」

という「其」は何を指しているのか、四十五字法体段の事の一念三千。本門の肝心南無妙法蓮華經の五字を受けて、其本尊のていたらくと続くのですから、これは皆繋がつてゐるのです。したがって「法体段」と「本尊段」は、別々のものではない。繋がつてゐるわけなんです。ですから、「其」という一字があつて「其本尊」というのは前の段を受けていると思ふのであります。「爲體」これは相貌、形です。その形は、「本師ノ娑婆ノ上ニ寶塔空ニ居シ塔中ノ妙法蓮華經の左右ニ釈迦牟尼佛・多寶佛・釈尊ノ脇土上行等ノ四菩薩文殊彌勒等ノ四菩薩ハ眷屬トシテ末座ニ居シ迹化・他方ノ大小ノ諸菩薩ハ萬民ノ大地ニ處シテ雲閣月卿ヲ見ルガ如シ。十方ノ諸佛ハ大地ノ上ニ處シタマフ。迹佛迹土ヲ表スル故也。」と説示されてゐるわけであり、四十五字法体段で明らかにされた事の一念三千。妙法五字本門の肝心。それを本尊として表された、その姿・形を仰ぎ見ると、久遠実成の本師釈尊が居られる娑婆世界の上に。これは、理想が實現した一天四海皆娑婆妙法の時の娑婆世界の上に多寶塔が虚空大空に浮かんで、その多寶塔の中央の南無妙法蓮華經の左側に釈迦牟尼佛、右側に多寶如來、更にその両側に釈尊の脇土である四大菩薩が並び、それから文殊彌勒、これは迹化の代表の四菩薩で眷屬として末座にあり、その他の迹化代表の菩薩。他方からおいでになつた大小様々な菩薩がさながら萬民が大地に座つて雲閣・月卿（身分が非常に高い公家貴族）を仰ぎ見るようである。そして、十方の世界から釈尊の説法を聴聞する為に集つてこられた釈尊の分身仏達は大地の上に身を置いておられる。迹仏・迹土をあらわしている姿なのであるということであり、これは、即ち「本尊段」と昔から言われておりまして、この本尊抄を御著しになつた約二ヶ月と十四日後に佐渡一谷に於きまして、ご存じの通り、佐渡始頭の妙法大曼陀羅が御図頭になられたわけであり、文永十年（一二七三年）七月八日のことでもあります。

誠に残念なことです。現在、その佐渡始頭の御真筆の御曼陀羅は伝わっていないわけですが、これは非常に残念なことです。これが伝わっておれば、大変ありがたいことでありませぬ。残念ながら伝わっておりませぬ。ただ、幸いなことに、身延山の三十三世遠沾院日亨上人が臨写されたというのですから、その時はあつたわけです。その真蹟をご覧になって、遠沾亨師がそっくり写された、そのまま臨写された御曼陀羅というのが、現在、藤井教雄総務の発行されました「御本尊鑑」、（これは復刻版です。）それに載っております。この大学の図書館にもあるはずであります。

それを見ると、これが佐渡始頭の御本尊であつたんだろうなということがわかるわけです。臨写されたというんですから、間違いなくそのままを写されたというのだと、考えられます。この遠沾亨師が臨写されました御曼陀羅をもとに、佐渡始頭の御本尊というのを拝見してみますと、ご存じの方々、大勢いらつしやると思いますが、総命の型式、即ち全部に「南無」という字が付いているわけですね。南無釈迦牟尼佛・南無多寶如来はもちろんでありますけど、鬼子母神・十羅刹女までが全部「南無」が入っております。そして、非常に注目されるのは、普通の御曼陀羅ですと「鬼子母神十羅刹女」と、書かれていますのですけれども、この佐渡始頭の臨写曼陀羅によると、十羅刹女の十人の名前が、向かつて右側に五名・左側に五名、全部「南無」の字を付けて十羅刹女の一人一人の御名前が全員載っているんですね。これも、この佐渡始頭の御本尊の非常に特徴の一つではないかと考えられます。他にもあるとおもいますが、一応そういうことが言われるわけでありまして、遠沾亨師の朱筆（朱でもって字が入っております。）「宗祖御一代最初の御本尊なり。」こう書いてございます。右上から「此経則為閻浮提人 病之良薬 若人有病 得聞是経 病即消滅 不老不死」これは、御讀文といつてますけども、こういう御讀文があります。更に、右下

の方に、「文永八年^{癸亥}九月十二日御勘蒙り佐渡の国に遠流。同十年七月八日これを図入」とあるんですね。そして、その下に「この法華經の大曼陀羅」と書いてある。この法華經の大曼陀羅というのですから、佐渡始頭の曼陀羅は「法華經曼陀羅」だったと日蓮聖人はお考えになっておられる。「仏滅後二千二百二十余年 一閻浮提のうち未だ嘗て之アラス 日蓮初めて之を図入」と書いてあります。ですから佐渡の始頭の御本尊と言われる理由がここであるわけでありませぬ。

実はですね。これは十界勧請のような形になっております。本化の四大菩薩、もちろん大日天・大月天それから天照八幡・四天王それから不動・愛染全部備わっているわけです。この本尊だけが、ちよつと特別という感じがいたします。飛び抜けている。佐渡でお書きになった御曼陀羅の中では、十界勧請になっているのはこの始頭の御本尊だけなんです。後の御本尊は、一遍首題あるいは不動愛染あるいは四天王、といった程度の御曼陀羅が圧倒的に多いわけです。ご存じの通り現在、日蓮宗に御真筆の御曼陀羅と鑑定されて、間違いないものとして登録されているのは、一二三幅だったんです。四幅新しいのが追加されて、現在では一二七幅御真筆に間違いないというものがあるわけです。それを年代順に、並べてみると、その内僅か十点だけが身延以外の地でお書きになったもの。つまり佐渡以後は、ほとんどのものが、この身延山でお書きになられた御曼陀羅であります。

「佐渡百幅」と通称言われますけれども、一番最初の「揚子の御本尊」。これを最初に拝見した時、凄く御曼陀羅だと思いましたが、佐渡の国へ日蓮聖人は、流人僧として行かれたわけでありませぬ。従って我々の常識で考える様には参りませぬ。当時は筆も墨も紙も紙も思うようにいかなかったわけでありませぬ。筆がだいたい無い。しかたがないので、庭の揚子の木の枝を折ってきて、それを叩き潰して、筆代わりにして御題目の一遍首題をお書きになった。これ

が通称「揚子の御本尊」という名前が付いているわけであり、日蓮聖人のお書きになったものだから、全部筆で立派な字でお書きになったものばかりだろうと思っていると、筆で書いてないものもあるわけなのです。だから、そう言われてみるとなる程、木の枝でお書きになった感じのするものもあるわけがあります。

この佐渡始頭の御本尊だけが、突出して、これだけなんです。身延以外でお書きになった十界勧請の御本尊は、あと全部ほとんどが一遍首題か、或いは四天王・不動愛染というふうな形の御本尊が圧倒的に多いわけです。圧倒的に多いといっても、僅か十幅ですけれども。この十界勧請の御曼陀羅が完成していったのは身延入山後、文永・建治・弘安になって参りますという、今資料のところには一幅だけ、写させていただきました。これは玉沢妙法華寺の「伝法御本尊」です。これは一例としてあげさせていただきました。こういう十界勧請の大曼陀羅として、完全な形の御曼陀羅が出来上がっていったのはやはり身延へ入られてからのことなのです。この十界勧請が佐渡の始頭の本尊の中にもみられるということは、これは本当に特例のような格好になっているのではないかと考えられます。おそらく、宗祖は佐渡で「本尊抄」をお書きになって、この本尊段を完成させられた後、二ヶ月十四日後にこの御曼陀羅をお書きになられた。この「本尊抄」のまま御願図になられたと考えられます。そして、次に花押を見ますと「日蓮」という御署名と花押がはっきり別になっています。この佐渡始頭の御本尊は、文永建治頃の御曼陀羅と比較して見ますと、日蓮という御署名と花押は次第に大きくかいておられる。それが段々と接近してまいります。弘安式の御曼陀羅になりますという、完全にドッキングしてしまっている。そして、弘安の中期から後期になりますという、日蓮の「蓮」はもちろんですが「日」の字までが、この花押の中に埋まってしまっている。だいたいこの花押とは何かということになるかもしれませんが、昔の僧侶や武士や、将軍は自分の実印の代わりに、この花押書判を用い、間違った

くこれは私の書ですよと、署名をする為に書判というものを付けたものなんですね。ですから武田信玄・上杉謙信、皆書判を使って公文書を出しているわけであります。今の実印みたいなものです。ちよつと他人に真似が出来ないように工夫をして、書判を作るわけであります。日蓮聖人の場合はアジとボロン二種類の花押があるというふうにもいわれています。花押のことを専門に研究された鈴木一成という先生がいらつしゃいますが、その先生の本を読んでみますと、そんなふうなことが出てまいります。これは、自分が書いたものに間違いがないよという証明と同時に自身であるということ、自分の書いたものに自分で責任を持たなければならぬ。その責任をはつきりさせるという意味で、この書判が使用される。だから書判は、その人の人格そのもの。その人を代表するもの。むしろ、「その人のもの」だと言つていいわけですね。書判が書いてあれば、その人のものに間違いがないということになって、人格を表すものであるというふうに、ですから日蓮聖人は御曼陀羅だけではありませんで、御遺文でも、大多数の御遺文の中にはほとんど書判が書かれているということであります。「日蓮がここにいるぞ」という意味だと思ふんです。この書判とご署名が、佐渡始頭の御本尊ですと左右に分かれております。これが段々接近してきて、ついに完全に花押の中に日蓮の字が収まってしまふというようなのが弘安式であります。ここにご覧いただくように、日蓮というこの「蓮」の字は完全に花押の中に入つてしまつてゐるわけであります。これが晩年、日蓮聖人が西谷で御顯図になつて、多くの弟子や信徒に御与えになつた御曼陀羅であります。この御曼陀羅につきましては、古来、日蓮宗では御本尊として信仰の対象となつております。ご存じの通り。御曼陀羅は、御本尊であると同時に、その他にもいくつかの意味が含まれています。実は、御曼陀羅の中には、本尊というだけの、ひとつだけの意味ではなかつたということが、いろいろな御遺文を拝読してみると出てくるわけであります。

まず、今の「本尊抄」中に出ておりますね。「但地涌千界ヲ召シテ八品ヲ説テ之ヲ付属シタマフ」。それから、「本尊段」の次を読んでみます。「是如キノ本尊ハ在世五十餘年ニ之無シ八年之間但タ八品ニ限ル。」といい先程みました佐渡始頭の御本尊の中にも、御讀文の中に「この法華經の曼陀羅・この法華經の御本尊」こういうふうにおっしゃっていますから、これはまさしく本門八品の説相図であると考えられるのであります。

釈迦牟尼佛がお出ましになって、そして、虚空会の説法が始まる。その説法の本門八品の説法の図を御表しになる。ですから「本師ノ娑婆ノ上ニ寶塔空ニ居シ。塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ釈迦牟尼佛・多寶佛・本化上行云云」。まさしく本門八品の説相図であるということがわかります。原語はマンダラーで梵語では、「諸仏集」とか「功德集」とか。中国では「輪廻具足」と訳されている様でありますけれども、曼陀羅で有名なのが真言の胎藏界と金剛界の曼陀羅というのもあります、これは絵曼陀羅でありますけれども、日蓮聖人の文字曼陀羅で、この様に本門八品の説相図ですから、同じ曼陀羅でも真言の曼陀羅とは根本的に違つてゐるわけです。更に先程申し上げましたように、「其本尊ノ爲體」ということから考えますという事の一念三千妙法五字・本門の肝心南無妙法蓮華經の内容をつまびらかに図に書いてお示しになられたのが、この大曼陀羅であるというように考えられてくるわけです。一念三千の或いは妙法五字の内容、そういうものを御顯しになったのが、この大曼陀羅である。ですから、この妙法五字、この御本尊の中には釈迦佛、十方分身の諸佛すべてこの中におられる。一念三千の法門我々「己心の釈尊」ということが本尊抄の中にも書かれています通りであります。

次にですね。諸佛諸尊の集まった、これは「お守り」である。日蓮聖人が御曼陀羅をお書きになって信徒や弟子にお与えになった。その、お与えになった御遺文の中に「お守り書きて參らせ候」とある。これが木像本尊ですとそん

なわけにいきませんが、御曼陀羅ですとクルクルとまるめて背中へ入れる。旅をして歩くのにも、非常に携帯便利ですね。どこでも掛けて「即是道場」として、信行の場となるわけである。「日眼女釈迦佛供養事」(一六二三頁)。「妙心尼御前御返事」(一一〇五頁)。等を読んでみますと御曼陀羅のことを「このお守り」と言っておられます。ですから日蓮聖人は、「お守り本尊」として、これをお考えになったということにもなるといえます。何かあったら、「この御本尊に御祈念しなさい。必ず諸天善神が法華經の行者であるあなたをお守り下さいますよ」と、お守り本尊という意味があったわけがありますね。

それから次に、弟子に与えた御曼陀羅の中にはお弟子さんの名前が入っております「弟子曼陀羅」というのもあります。出家、得度、度牒する時に師匠から弟子曼陀羅というのを、たいがいの方が師匠からもらっておられるのではないかと思いますけど、弟子、法子、いろいろな言い方があります。「だれそれ化道成弁を祈る者なり。何月何日」とその曼陀羅が、「私はあの人の弟子だよ」という証明にもなるわけですね。ただ口で、私はあの人の弟子だ。私は法主様の弟子だ。管長の弟子だと言っても本当の事はわからないわけです。ところが、弟子曼陀羅というのをみせて、この通りですというと、間違いなくあの人の弟子なんだということが証明出来るわけですね。そんなふうな意味も込められているのかもしれませんが、弟子曼陀羅というふうな意味もあるわけですね。

まあ、話がちよつと余談になりますけれども、後世、本家から分家をいたします。二男・三男、新しく家を建てる。そして、そこへ菩提寺の住職さんをお願いして、新しく仏壇を作つて、その仏壇に曼陀羅をお祀りする。そういう時に菩提寺の住職が、「何年何月何家から分家をした誰それに、この御曼陀羅を与えるものなり。」と記入される。これが後に、私の家は何年何月どこの家から分家をした家だと、家系が、それで証明出来るわけです。昔は、役場なんて

ものが無かったですから、お寺のそういうもので証明されていたこともあり、新しく檀家になった人に与える、そういう御曼陀羅によつて、寺檀の關係が証明が出来る。そんなようなことにも後世伝わられていったわけであります。ですから、御曼陀羅というのは身分の「証明書」にもなっているわけなんです。とりあえず日蓮聖人の、「日眼女釈迦佛供養事」・「妙心尼御前御返事」という御書を読んで見ますと、御曼陀羅のことを「此のお守り書きて參らせ候。」とある。

次にですね。今度は、日女抄を拝読して見ますと「妙法五字の光明に照らされて十界は全て成仏したところの姿だ。」十界皆成の姿を図に書いて表したものが、この御曼陀羅であると説かれています。「日女抄」の御遺文からいくと妙法五字の光明に照らされて、十界の全てが本有の尊形を表した姿である。我々はこの理想図であり、青写真であるこの目標を掲げて、現実の世の中を一日でも早く、こういう世の中にしていこうとそれに向かつて日夜努力をするということにもなる。ということとは、これは仏国土を意味している。仏国土を表したものである。法華經行者の浄土を靈山浄土という。靈山寂光浄土ともいう。略して靈山浄土という。それを図に書いて表したのが、この妙法大曼陀羅であるということになります。「靈山浄土」については、内容が簡単には説明できない重い意味がありますので、又別の機会に申し上げたいと思いますが、それから、それと関連してきますと、日蓮聖人一代の御理想は何と云つても「立正安国」であつたわけです。「立正安国一天四海皆帰妙法」ということになります。これと関連してきますが、その立正安国一天四海皆帰妙法の世界を具体的に図に書いて表すと、こういうものになりますよということ、この「娑婆即寂光皆帰妙法」。これを図に書いて顕していることになる。「本尊段」で述べられた御本尊を具体的に図示される。その中には、こういう重層性をもつた意味合いが込められているわけです。

尚かつ「経王殿御返事」(七五一頁)、を読んでみますと「この大曼陀羅は日蓮の魂を筆に埋めて書き表し候ぞ」とあります。これは「日蓮の魂」であるということで、この御曼陀羅を見てくれば、「これが日蓮の魂なんだよ」と、こうおっしゃっておられます。こういうことでありますから、こういった御遺文を総合して考えたと、ただ単に御本尊というだけではなくて、色んな大曼陀羅の中には意味が沢山込められているということがわかると考えられるわけがあります。

また、次に前にも少しふれました御署名のところに入っていくわけですが、身延へ入ってから、この御本尊が大成されていって、こういう最終的に完全な十界勧請の御本尊が書き上げられているわけですが、必ず御署名・花押を入れておられる。何故、必ず御署名・花押なんだろうということになってくるわけですが、これはですね。前のべたことの他に身延へ入られてからの日蓮聖人のお考えによるものであると考えられます。ご存じの通り入山の当初、文永十一年五月十二日、鎌倉を出発。泊まりを重ねて、十七日にお着きになった。お着きになったその日に富木殿にお与えになった御書を読んでみますと皆さんよくご存じの通り、あの総門にお着きになって身延の山を初めてご覧になる。ただ一目見ただけで、山の様子も何も詳しいことはわからないけれども、「心中に叶った山なので暫くはこの山に留まるであろう。」と書かれてある。暫くは、この「暫く」という言葉も解釈の仕方によって違ってくるわけですね。例えば、大学の受付に入ってきて誰その先生にお会いたいんですが、「暫くお待ち下さい。様子を伺ってまいります」。その場合は、ちょっとの間、少しの間ここで待っていて下さいということだと思っんです。ところが、同じ暫くであっても、これが町で久しぶりに友達と出会って、「オー、暫くだったなあ」とこういった時の暫くぶりというのは、昨日や一昨日会ってれば暫くぶりとは言いませんですね。長いこと会っていない、暫くぶりだな。だ

から日本語というのは正反対の意味をもってしまうんですね。時と場所、使い方によって暫くという言葉一つ例に取っても、長い時間を表す場合と、ほんのちよつとを表す場合。この場合は、「暫くは」というんですから、「ほんの短い時間この山に居ることになるだろう。やがては法華經の行者として日本国をまわって、法華經の題目を広めて歩く身だ。」こういうことだと思えます。ですから入山の当初は暫くはここにおりますよ。ですから波木井公が立派な御堂をお建てしてあげようとしても、暫く居て出ていってしまうのだから、そんな立派な御堂は必要ないよと言うんで、「十二本の柱から成る木の葉うち敷きたるような」木の皮をはいで屋根を葺いた、文字通り雨露を凌ぐに足りる程度の草の庵、御草庵が出来上がったわけなのです。ところが、それじゃあ本当に暫くで出ていくおつもりであったのかというと、一年二年おられる間にどんどんお考えが変わっていった。入山されて暫くたつてから、「種々御振舞御書」によると、これは三つの御書が一緒になって「種々御振舞御書」となっているんですけれども、その最後の方は「光日房御書」だということですから正確には「光日房御書」ということになるかもしれませんが、「日蓮は南無妙法蓮華經と唱うる故に二十余年所を追われ最後にはこの山にこもる」。もうその時点になると「最後はこの山」と言うんですから、この身延山で自分は最後になるんだと、そう考えが変わってきていたのですね。僅かな時間ですよ。入山された時は、暫くの間と言っておきながら、ほんのちよつとの間に「最後はこの山にこもる」と、この御遺文が出てくるといふことをみると、日蓮聖人は日ならずして身延山が、第一印象の通り「心中に叶った山」だったんですね。ですから、ずっとここで私は永く住みます。仮の入山であったが、何があっても、「もう私は、この山から出ません。」その翌年「撰時抄」、そのまた翌年「報恩抄」が書かれております。「報恩抄」の中には、「たとえ如何なる女院・上皇のお召しであつても、よつほどのことがない限り、私はこの山からはもう出て行くことはしません。」とい

うことは常住説に変わっているわけです。それから、弘安四年、御入滅になる前の年に大坊・小坊馬舎ができた。もし本当に飯のおつもりだったとしたらば御草庵が朽ち荒れてきて、柱がよろび、壁も穴があいた。これを機会にまた余所へ出ようかという時期はあったと考えられるのですが、少しも離山の気配はなく、ずっと常住説を通された。そして最後、「波木井殿御報」をお読みいただくと、入滅後といえども「日蓮が魂はここにおりますよ。だから墓をば身延の沢に」とこういうことになって、これはもはや永住説といえます。飯の入山から常住へ。常住から永住へ。ずっとお考えが変わってきた。それが、大坊・小坊馬舎を持った、このお堂を建立される原因になったのではないか。どうせ大坊・小坊馬舎を持つような立派なお堂を建てるんだったならば、日蓮聖人入山の当初に、そういうものを建ててもらえばよかつたのではないかというふうに考えられるのでありますが、実はこういう推移の後をたどっておられるわけなのです。この推移の後と同じように、この身延靈山説というのが出てくるわけです。

ご存じの通り、「身延山御書」。本山生の諸君は、毎日読んでますから、もうよくご存じだと思いますが、この身延の山は本朝の靈鷲山である。「日本の靈鷲山だ」と、「釈迦・多寶・十方分身の諸佛は、この山におられる。そして、朝夕日蓮の唱える法華經御題目をお聞きになって下さっておる。」ですから大勢の檀信徒からいろんな御供養の品が届きますという、まず、「釈迦佛法華經に申し上げた。」釈迦佛法華經に「お供えした。」と必ずそう書いてあるわけですね。したがって、日蓮聖人が身延の山におられて、常に釈迦佛法華經十方分身の諸佛と、ご一緒に寝起きされておられる。「靈山浄土」は「本朝この身延の峰也。」という身延靈山説が出てくるわけなのです。ここに「靈山往詣」というのが出てまいります。「本尊抄」の副状にも、「靈山に詣で」と出てまいります。身延山へ入ってまいりますと、この身延靈山説。靈山往詣説が一層明確になってまいります。従来靈山往詣と言いますと、法華經行者が死ん

でから行くべき所のように考えられてきました。しかし、日蓮聖人の身延期の御遺文を拝読して見ますと、こういった「今の日蓮は朝夕、法華經釈迦佛と一緒にいるのだ」という。ですから日蓮聖人が朝夕、法華經をお読みになられたその「聖なる時間」は、日蓮聖人は釈迦佛法華經といきあつて一緒にいられた。「ここはもう、浄土だ。法華經行者の住所を浄土と思うべし。」とはつきりおっしゃっているわけです。だから日蓮聖人の極めて宗教的な宗教者としての「聖なる時間」は、靈山往詣をされていたと考えられます。

そして、だから、「この大曼陀羅の中に日蓮もここに居ますよ。皆さんもここへ、みんな入つて来て下さい。入れますよ。」というのが靈山往詣なんです。即身成佛、娑婆即寂光ということを、証明しているわけです。「日蓮が靈山往詣している」ということを、はつきり証明されている。その場に大きな字で、大きな書判で、日蓮という御署名がなされている。靈山往詣をされておる「聖なる時間の日蓮聖人」であることが明白となるのであります。ご署名と書判の最も宗教的な理由はここにあるといえましょう。

時間がボツボツ参りましたので、終わりにしたいと思います。ただ、死んでからだけ行くところが、靈山往詣であり靈山浄土だと固定概念で考えてしまうとという理解ができなくなるのです。我々即身成仏、娑婆寂光ということはどういうことなのか。一心に法華經を唱えて、本門の三大秘法を身・口・意の三業に受持していく、法華經の行者の住所を、常に靈山としていく。聖なる時間、宗教者としての時間。それが日蓮聖人の西谷におけるご生活であった。その反面、「八寒地獄の業苦に攻められて、食べる物も着る物も無い。身延は、これは地獄だ」とおっしゃっている御遺文もあります。これは人間としての時間、聖なる時間から離れて、人間としての時間で考えると、同一の山であっても、地獄であつたり、食べる物もろくに無い。着る物もろくに無い様なこの山の中は、八寒地獄の状態だと感じと

れる。凡夫の眼で見るとそう見える。ところが、純粹に聖なる宗教的な立場で御覧になると、「日蓮は常に朝夕、釈迦・法華經とこの山におられる。だからこそこの山は靈山淨土だ。日蓮は弟子檀那がそのつもりで、この大曼陀羅を信仰して、大曼陀羅の中にみんな入ってくるように、そして、娑婆即寂光、理想実現の為に努力すべきである。」というようにおっしゃっておられたと思わなければならない。これが「事の一念三千」の法門ということにもなります。

ちょうど時間が参りました。申し足りない点が多々あったと思いますが、御寛容いただきましたと存じます。難解難入の本尊段であり、事の一念三千・妙法大曼陀羅の世界、そして靈山往詣に至るまで、「信」の領域を限られた時間内で可能な限りを申し上げます。もとよりこれは冰山の一角であります。

長い間この学校でお世話になりましたが、本日はこうして最終講義をさせていただきます。感謝をするしだいでございます。

誠にありがとうございました。